

氏 名：小林 千 紘

学位の種類：博士（看護学）

報告番号：甲第107号

学位記番号：共博第3号

学位授与年月日：令和4年3月17日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論文題目：福島原発事故による長期避難からの帰還後を生きる人々の日常

Daily Life of People after Returning from Long-term Evacuation due to  
the Fukushima Nuclear Accident.

論文審査員：主査 野 口 眞貴子（主指導教員）

副査 宮 崎 美砂子

副査 佐々木 吉 子

副査 中 山 洋 子

副査 吉 田 みつ子

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、福島第一原子力発電所事故により居住地からの避難を強いられ、その後に帰還した地域住民を対象としている。彼らが帰還した日常をどのようにとらえているのかを明らかにするため、Gadamer(1975/2012)の解釈学を哲学的基盤とした質的記述研究デザインを採用している。帰還住民7名の半構成的インタビューデータを中心に分析、解釈するとともに、起点とした当該自治体内の民間医院のスタッフへのインタビュー、および帰還住民への医院スタッフによる訪問診療場面の参与観察で得られたデータを、帰還住民の日常の解釈を複層的に深めるために用いた。その結果、帰還住民それぞれから1つ、計7つのテーマが抽出され、これらは27のサブテーマで構成された。本研究結果より、被災後に経験した家族の死に代表される喪失を礎に、原子力発電所にもたらされたものを引き受けて生きるという帰還住民の日常のありようが考察された。

審査では、医院スタッフへのインタビューデータと参与観察のデータの位置づけ、テーマ、サブテーマに至るまでの導き方や整合性、帰還住民の日常のとらえ方の広がりや継続性、論文記述内容や概念の正確性について問われた。

申請者は、研究の起点である当該自治体の医院、医院スタッフは、福島原発事故のはるか以前より避難中、帰還開始後に至るまで、一貫して帰還住民とともに生き抜いた同志であり、帰還後の新たな日常の拠り所、変わらぬ「ふるさと」を感じられる場と考察した。これに医院スタッフのデータ、参与観察データは寄与しているが、帰還住民のデータが中心であり、研究目的である帰還住民の日常を解釈するための論理をより明示的に示すべきではある。またテーマ、サブテーマは、住民の複雑な思い、避難中の過酷な体験を経ての日常を率直に示すという手順を説明した。

本研究は、原子力災害から10年を経過した今だからこそ示せる帰還住民の日常を、Gadamerの解釈学を基盤にした、これまで行われていない新規性のある看護学研究である。原子力災害の経験と知識の蓄積に貢献するとともに、災害という特殊、かつ過酷な経験をした「看護を必要とする人」の理解を進めるためにも寄与する。帰還住民のなかでも高齢者、女性が大半という研究対象ではあるが、研究フィールドで長年、丁寧に関わってきた申請者だからこそこの研究といえる。

以上より、審査員一同は、本研究成果を評価し、共同災害看護学専攻の審査基準を満たしていると判断し、博士(看護学)の学位論文として「合格」と判定した。